

## Column

### Nスペ「JAPANデビュー：アジアの“一等国”の向こうにあるもの

桂 敬一



今回、NHKを自分たちのいいなりにさせようと蠢動をみせだした、小林経営委員も含む勢力がいちゃもんをつけたのは、この番組に対してでした。これに対して、NHK側が十分に毅然と立ち向かっており、私たちはそれを、安心して激励していけばもう大丈夫だ、といえる状況になっているでしょうか。私にはどうもそうは思えません。今回の騒ぎは、大きな揺さぶりと干渉の前のほんの序奏であって、これから勝負だと思っています。

「JAPANデビュー」シリーズは、NHKが現時点を歴史の大転換点と捉えて構想した、壮大な「プロジェクトJAPAN」の一部でしかありません。それは、「未来へのプレーバック。私たちは、世界の中でどう生きた。そして、これから、どう生きる。」をキャッチ・フレーズとする、いわばNHK版『バック・トゥー・ザ・フューチャー』で、「2009年 横浜開港から150年」「2010年 韓国併合から100年」「太平洋戦争開始70年・サンフランシスコ講和条約60年」とする構成で、今年を含め3年にわたってさまざまなスペシャル番組を展開していくという、実に壮大な企画です。詳細は、ぜひNHKのサイトにアクセスしてご覧ください。

[www.nhk.or.jp/japan/about/index.html](http://www.nhk.or.jp/japan/about/index.html)しかし、こういう企画が歴史的転機としての21世紀の今を正しく照らし出し、この後の日本の望ましい針路を描き出せるかといえば、その保障はまったくありません。むしろ、過去の歴史的転機の捉え方、そのときどきの問題設定をみると、第2次大戦敗戦以後の歴史の意味を全部ひっくり返し、それ以前の日本の歴

史的正当性を蘇らせ、これを21世紀の今に、無理にも（見かけはいかに自然に）接ぎ木しようとすることになるおそれがある、と危惧されます。今度の騒ぎを起こした連中は、そうさせていくことができる可能性を値踏みして、NHKに対し、「プロジェクトJAPAN」全体をちゃんとやれ、いい加減なことをしたら承知せんぞ、と動きだしたのが本当のところでしょう。この威嚇効果は馬鹿にできません。NHKはイデオロギーがどうのこうのより、“興行的”にこのプロジェクトをぜひとも成功させたい弱みがあります。敵は、そのアキレス腱を容赦なく狙ってくるからです。

この大プロジェクトのなかで、目玉中の目玉は、司馬遼太郎原作の小説、『坂の上の雲』のドラマ化です。これもまた、2009年に11月29日（日）から年内の全日曜日・5回の特番で放送するのを嚆矢とし、つづけて2010・2011の両年もほぼ同じ時期、それぞれ4回の連続特番ドラマとして制作・放送する予定とされています。本年5回分のロケーション撮影は、国内18都府県、外国＝露・中・仏・英などで素材撮りをほぼ終えたようです。ロケの行われた登場人物ゆかりの県では、すでに大々的な番組宣伝・イベントが行われつつあり、前人氣が煽られています。多くの財界人や大物政治家が好きな作家のトップにもってくる司馬遼太郎、しかも、本当の主人公は「日清戦争」「日露戦争」そのものだともいべき『坂の上の雲』が原作のドラマです。これがNHKによって3年もつづけて放送されるというのは、まさに容易ならざることです。

司馬遼太郎は生前、この作品のテレビ・ドラマ化も映画化も許さない、と明言していました。容易に戦争賛美の話に仕立てられてしまう危険があることを、危惧したからです。日本近代の青春時代ともいべき明治期の青年たち、正岡子規や秋山兄弟たちの青春群像を描こうとした自分の意図がねじ曲げられるのを、おそれていたようです。ところが、彼の死後、NHKの海老沢勝二会長（当時）が、2005年に日露戦争100年を記念した大河ドラマ『坂の上の雲』を放送したいと考え、遺族を猛アタック、ドラマ化権を獲得、作家・野沢尚に脚本作成を依頼したのです。ところが、野沢尚は脚本未完成のまま自殺し、NHKは、2004年に受信料使い込み不祥事件が起き、2005年には政治家の介入によるETV2001番組改変問題が発覚、受信料収入の低落も生じ、海老沢会長が辞任、ドラマの実現は大幅に遅れる結果となっていたのです。

ところが、フタを開けてみたら、海老沢後のNHKは、1年こっきりの大河ドラマよりはるかに巨額の制作費を投じ、有名俳優・タレントを多数動員、3年にもわたって放送する巨編ドラマをでかしあげる方向に進んだのです。いってみれば、これは焼け太りです。しかも、時代は、2005年・小泉郵政民営化選挙の大勝、自民党の改憲方針具体化、安倍改憲内閣登場・防衛省出現、麻生内閣の対「北」強硬政策の繰り返し・海賊対処法制定、などの出来事が生じ、戦後の平和体制を否定する勢力がいつの間にかのさばり、日本がこの21世紀にありながら、国際社会における軍事的プレゼンスをまた大きくしつつあるのが、最近の事情です。政治の実態は、安倍政権以後、あてどない漂流をつづけるだけで、戦後政治

最大の危機が生じているというのに、このような事態が放置されています。その責任をメディアも大きく負っています。現状追隨に流れて国民の劣化を招き、その国民に迎合してみずからも劣化を深め、こうした負のスパイラルから抜けきれないからです。

NHKが向こう3年間、政財界の“司馬好き”歴史を物語る彼の語り口の面白さに魅せられる国民の人気にかまけて『坂の上の雲』を放送、大成功を獲得したら、いったいどういうことになるでしょうか。一つの番組の偏向、良否を論ずるといふ番組批評の領域をはるかに超え、戦後民主主義の経験と、そこにおける歴史認識を土台に形成されてきた国民世論のありようが、大きく変質することになり、NHKというもののあり方そのものが、大きく変わる変えられてしまう危険がある、と私は憂慮するのですが、それは杞憂でしょうか。あるいは、国民的合意の下にNHKが変わっていくのなら、国民のNHKを標榜するNHKにとって、それは望ましいことだ、というべきなのではないでしょうか。3年後に生じ得るこのような状況を心配し、私は今、NHKは

重大な危機、未曾有の危機に立ち臨んでいる、と思うわけです。そして、3年後、国民の名において、まるごとNHKをおかしな勢力に奪い去られないようにするために、市民として今なにをすべきか考え、できることはなんでもやっていく必要がある、と思うයි。

世界の歴史状況は、オバマ米大統領の出現が象徴するように、究極の核廃絶を目指すうえで核被爆国・非核3原則をもつ日本が、他国にはできない積極的役割を果たすことができる意味を浮かび上がらせるとか、そうした方向の先で東アジアの非核化・地域安全保障が実現する可能性があること、なども考えさせ、私たちが本当に大きな転換期に入っていることを示唆しています。日本にもいろいろ新しい針路を模索するオプションが提供されているわけですから。私たちは、このような変化に対応し、NHKが変わるべきはどのような方向に向かってなのかと、つねに問いかけ、NHKが進む道を過たず、私たちの半歩先ぐらいを歩き、市民を適切に望ましい21世紀の世界に案内する役割を果たすよう、求めていく必

要があります。「プロジェクトJAPAN」の本当の成功は、NHK自身がそのような自覚をみずからしっかりとてことに当たらないと、達成は不可能でしょう。

NHKは、「プロジェクトJAPAN」内のほかの番組、たとえば先の「アジアの“一等国”」(台湾問題)では、植民地問題をきちんと取り上げましたが、番組によってはそのようにある方向に意識的に傾きをつけておいて、それとバランスをとるかたちで、『坂の上の雲』では、当時のナショナリズムを前面に出すなどの芸当をみせてくるのではないかと、今からいささか憂鬱な気分です。このようなNHK流の中立公正の装いは、ときに遅効性の劇毒を、気付かれないようにまき散らすやり方となるからです。このような状況の出現をめぐっては、何度も、おかしな勢力とのつばぜり合いをすることも、覚悟する必要がありますが、私たちは鳩のごとく優しく、蛇のごとく賢く、一致結束して相手を凌いでいきたいものと、思います。

2009/07/03

